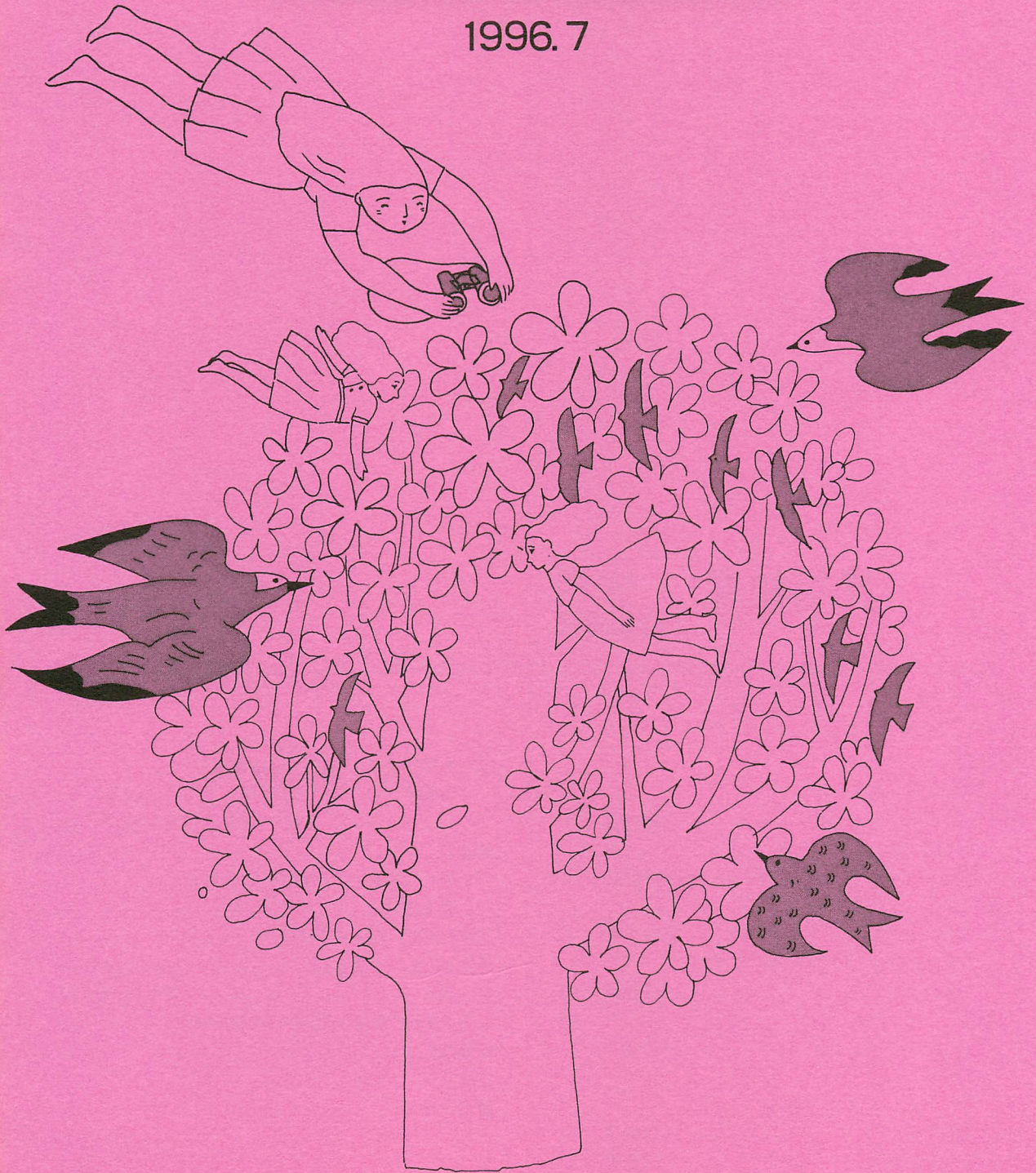


49号

愛鳥教育

1996.7



全国愛鳥教育研究会

巻頭言

実績発表大会について

(1)その由来と背景

会長 江袋島吉

◇ はじめに

平成7年度の“野生生物保護実績発表大会”は、昨年末の12月6日(月)に行われたが、本大会は第30回という節目の大会にあたる。

この意義深い機会に、本大会の系譜について思いを致すことは、満更無意味ではないものと考え、概説を試みる所存である。

◇ 戦前 ～ 明治・大正・昭和初期

国の業務として鳥獣保護活動や保護思想の普及が行われるようになったのは、農商務省による明治25(1892)年の“狩猟図説”の刊行をもって嚆矢とする。

一方、民間にあつては大正元(1912)年に日本鳥学会が発足、本来の学問的研究に加えて、鳥類愛護の思想の普及を目的とした活動を始めている。

鳥獣の保護活動が法律として制定されたのは、大正7(1918)年の“狩猟法”が初めてであるが、これを契機として政府部内に鳥獣行政専任職員が配置され、翌8(1919)年には鳥類調査事業を開始、保護思想の普及活動も本格化した。

大正11(1922)年には、それまでの鳥類実験場を鳥獣実験場に改組、当時としては画期的な陳列室を設け、剥製の標本を中心に、映画・スライド・写真・掛図・カセット・AV機器・その他多数の資料・機器類の充実整備を図った。

昭和時代に入ると、戦時色が濃くなり、目立った動きも見られなかったが、そのような時代の中にあつて、幼時より野鳥の生態に深い興味を示して熱心に研鑽を積まれ、当時の皇族としてはタブーとも思える軍籍を離脱された山階芳麿殿下には、東大理学部動物学科に入学の上さらに研究を重ねられ、昭和7年には自邸に山階鳥類標本館を開設、念願の研究生活を始め、“鳥の宮様”として親しまれるようになった。これが発展して現在の山階鳥類研究所になった次第である。翌8年には“日本の鳥類とその生態”の名著を発表されて学会の注目を集めると共に、日本鳥学界また野鳥愛護団体の支柱的な存在として重きをなされ、終生を野鳥保護につくされた。

◇ 戦後

終戦後の混乱した世相のもと、平和と民主主義を試行した諸行事・諸活動が展開する中であつて、いち早く昭和22(1947)年3月に、日本鳥類保護連盟が山階芳麿氏(幹事長)の手によって創設され、4月10日には“愛鳥週間”の前身である“バード・デー”の第1回記念行事が行われた。氏は翌23年からは会長となり、25年からは毎年5月10日から16日までを“バード・ウィーク”(愛鳥週間)とされた。

この間、昭和24(1949)年には林野庁が発足、国立公園法が修正され、また、特別保護地区が制度化されている。

翌昭和25年には前述の“バード・ウィーク”が定められ、農林省の主催によって“野鳥のつどい”が開催されている。

昭和32(1957)年に、日本鳥類保護連盟は財団法人となり、昭和36年以降、“野鳥保護のつどい”改め“全国野鳥保護のつどい”を林野庁と共催することとなった。(以下、連盟と称する)

昭和38(1963)年に“狩猟法”は“鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律”と改題の上改正され、本法によって鳥獣保護員制度の誕生を見た。

また、同法に基づいて各都道府県知事は以後毎年“愛鳥モデル校”の指定を行い、児童・生徒に対する鳥獣保護思想の普及を図ることとなった。

第1期のモデル校は小・中合わせて約300校に及び、これが2年間の研究を重ねた昭和41(1966)年に、林野庁と(財)日鳥連の共催のもとに第1回“鳥獣保護実績発表大会”(以下、“実績発表大会”と称する)が開催され、“実績発表大会”のルーツとなっている。本大会はさらに昭和46(1971)年の環境庁の発足に伴って同庁と連盟との共催となり、さらに同庁の機構改革に従って平成2年度より“野生生物保護実績発表大会”と名称を変更、今日に至っている。

以上、本大会は敗戦後脅威的な復興を遂げ、経済大国となった我が国の、相次ぐ開発に伴う自然破壊がもたらした所産ということが出来る。

次回以降は、内容的な事項に触れたいと考える。

冬期研修会報告

バードウォッチング in 多摩川

常務理事 小野 紀之

平成7年12月9日。今年で4回目を迎える(財)せたがやトラスト協会主催の「1000人バードウォッチング」に、昨年に続き(財)日本鳥類保護連盟とともに全国愛鳥教育研究会も後援として参加。冬期研修会を実施した。

当日は、世田谷区民をはじめ、東京、神奈川、埼玉、千葉など遠方から駆けつけた人もいて、親子を中心に約700名の参加があった。92年の第1回が800名、93年600名、94年700名と、毎回多くの人々が参加する恒例の行事となっている。また、準備から当日の観察指導まで、すべてにわたって、ボランティアを中心にこれだけの規模の野鳥観察会を行っているのも、(財)せたがやトラスト協会の大きな特徴のひとつと言えるだろう。

昨年は、バードウォッチングにネイチャーゲームの手法も取り入れた自然全般の観察会だったが、今年は、“初心に戻って野鳥をじっくり観察してみよう”というコンセプトで行われた。参加者には、例年通り『キーボード50』とイラストマップが配られ、自分の好きなところで自由に観察をしてもらった。観察のお手伝いをするボランティアは、野鳥を見る楽しみを知ってもらうことはもちろんだが、今年は“観察された野鳥について、最低限こんなことは説明してあげよう”と、解説用のマニュアルも事前に準備するほどの熱の入れようだった。すべてが手作りの観察会。そんな想いが参加者にも伝わっていたことだろう。

最後に、今回は子供の参加者への対応として、凧作りと凧上げを予定していたが、晴天にも拘わらず風が強かったため、凧作りだけで、上げることが出来なかった。しかし、子供たちは、当日観察した野鳥の絵を図鑑などを見ながら、材料となるスーパーのショッピング袋に描いて、ススキを利用した骨木と組み合わせて工作を楽しんでいた。正月を前にして、ゲーム機ばかりではなく、野外で遊んでほしいというボランティアの人たちの想いがここにも現れていたようだ。

身近な自然をもっとよく知ってほしい。その方法のひとつが野鳥観察だが、いろいろなボランティアの人たちが参加することによって、多くのアイデアが集まり、新しい発想の観察会が生まれている。たかが野鳥観察会、されど野鳥観察会。私たちが専門知識の習得に努力するとともに、常に新鮮な視点を持つことをボランティアの人たちから教えられた研修会だった。



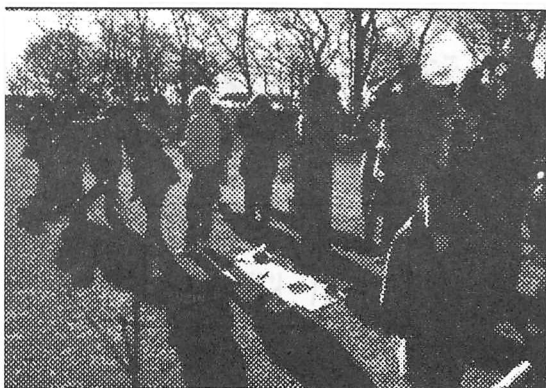
解説メモの資料検討



解説用の野鳥パネルも手作り



野鳥観察



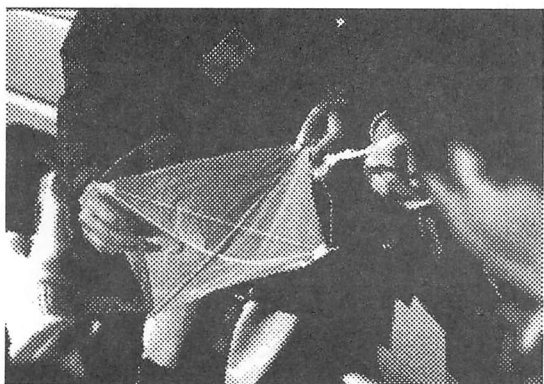
野鳥観察



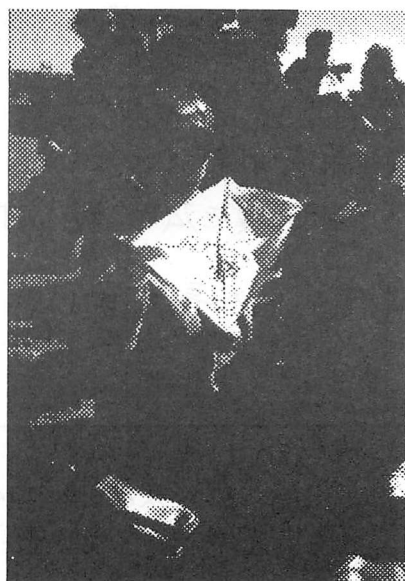
説明に聞き入る子供たち



凧作りの説明を聞く子供たち



ショッピング袋にススキの骨木を取り付ける



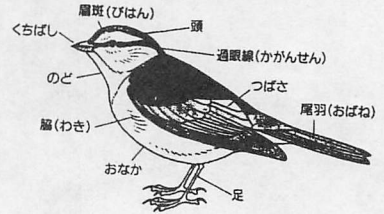
完成したダイサギの凧

トラスト・バードウォッチング～入門編～

野鳥ボランティア用
キーボード解説メモ



(財) せたがやトラスト協会



鳥の基本図

作成：野鳥ボランティアグループ
発行：(財) せたがやトラスト協会
1995年12月9日

カワウ (科)

- (1) 水中に潜って獲物をとる
- (2) 編隊飛行
ぬれた翼を広げて乾かす
- (3) 首と尾が長く黒い

(その他のエピソード・図)

朝、上野不忍池・浜離宮などの水辺から
餌場へ向けて飛び立ち、夕方、水辺
へ帰り、

カワセギ (科)

- (1) 体に比べてでっかい頭に
長いくちばし
- (2) 腹がオレンジ色、背は
コバルトブルー
- (3) 魚とりの王様
(カワセギの英名: King fisher)

(その他のエピソード・図)

飛ぶ鳥石
といわれる

トラスター・ワールドウォッチ



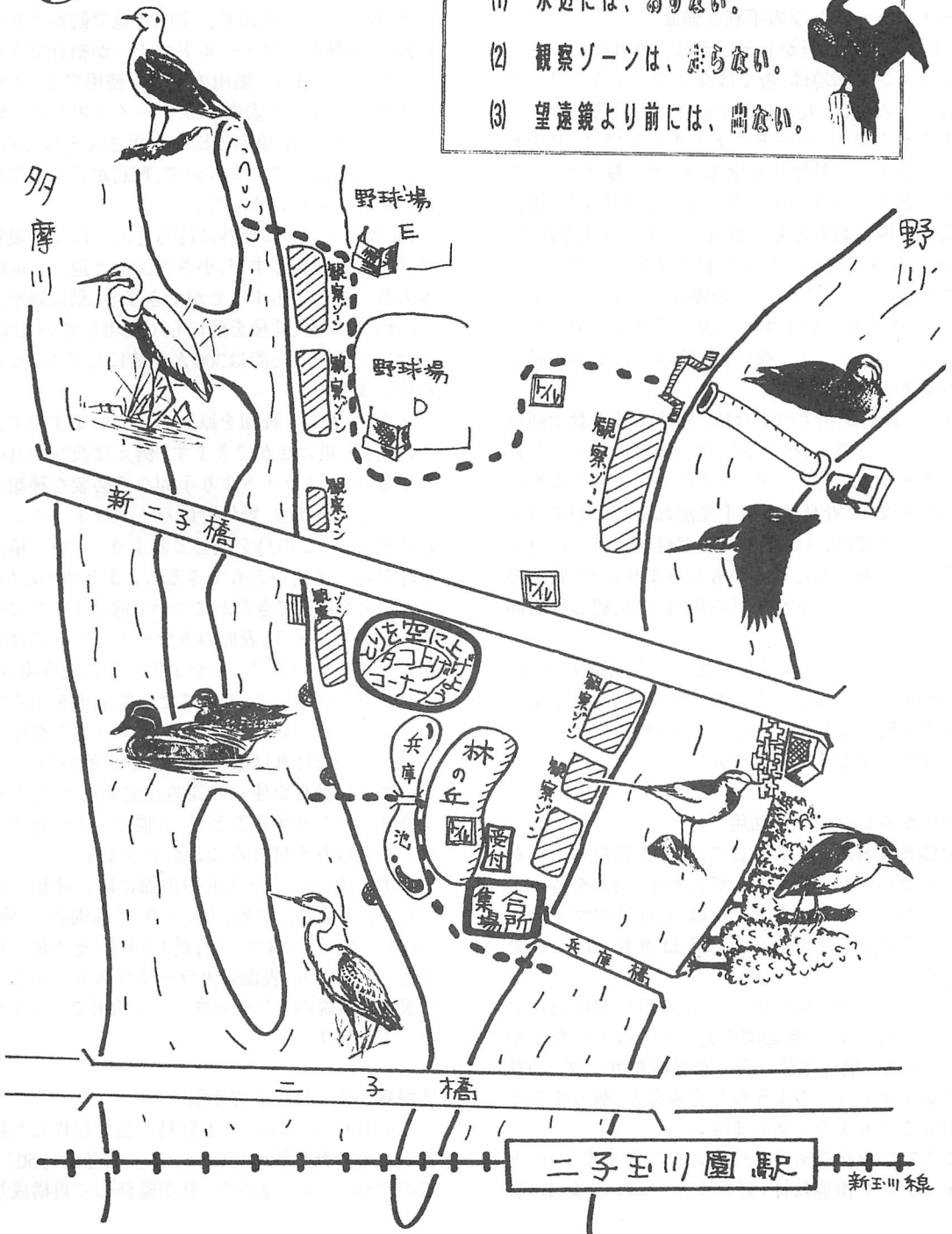
'95まちづくりリレーイベント



フィールドマップ

水鳥とぶつかることになる。3「ない」ルル

- (1) 水辺には、おひない。
- (2) 観察ゾーンは、ぶらない。
- (3) 望遠鏡より前には、あなない。



教材紹介

「野鳥かみしばい」のすすめ

(財)日本野鳥の会ネイチャースクール 安西 英明

バードウォッチングの不利な側面

「アクティブか、否か」と言えば、野外でのバードウォッチング指導は、否ではないでしょうか？ それは多くの場合、大きな声や動作は野鳥を脅かしてしまうからです。バードウォッチングでは「鳥を脅かさないように観察する緊張感」や「静けさ」を楽しむことをプラスに捉えることもできますし、本誌の論説「環境教育と愛鳥教育」で平田寛重さんは、「静かに接するという態度が自然環境へのローインパクトということについての理解を促すことにもなる。」と書かれています。一方、子供を対象にした場合は、アクティブでない分、飽きられるのが早い傾向があると思います。

また、野鳥が相手の場合は、同時に多人数で観察するという行為も、植物や昆虫の観察に比べると難しいことが多いでしょう。さらにマイナス要素をつけ加えるなら、野鳥は直接手で触れることができません。大人では、「距離のあるお付き合い」にロマンを感じる方もおられるかもしれませんが、興味の持ち方がストレートな子供の場合には、難しい側面かと思えます。

一方で、野鳥は、ほ乳類に比べたら見やすい、昆虫や植物と比べると動きがわかりやすい、見る楽しみ以外に聞く楽しみもあるなど、観察素材としてのプラス面も少なくありません。

「野鳥かみしばい」の活用

愛鳥教育のスタートとして、まず子供たちにいかにか野鳥やバードウォッチングに興味・関心を持ってもらうかということを考えた場合、前述のマイナス面をどう克服するかということは重要ではないでしょうか？

触覚によるアプローチという点では、私は鳥の羽をよく活用します。風切羽の先に行くほどしなやかなつくりや、飛行力学に沿った微妙なカーブ、羽弁のマジックテープのようなしくみなど、触ってこそわかることも少なくありません。

ここでは教材を紹介させていただきます。バードウォッチング指導教材「野鳥かみしばい」は、B4版

の52枚のカード形式で、全国各地で観察されやすい野鳥74種類とフィールドマナーが紹介できるようになっています。風雨の中でも使用でき、かつ軽い素材で、カード表面のカラーイラストは「野鳥シート」でもお馴染みの松原巖樹さんをはじめ、野鳥画で著名な方によるもので、野鳥が暮らす環境も描き込んでもらいました。

B4版のカードは野外に持ち運ぶにはほぼ限界のサイズと思われますが、小さな凶鑑と違って同時に多人数に対して示すことができます。私は観察会のまとめで数十人前後を前にして活用していますし、公会堂で講演した際は300人を前にしても、なんとか使えました。

また、1枚に1種類を原則としていますので、自由に選択、組合せができます。例えば教室で鳥の話をする時に、スライドより手間なく必要な種類を示すことができます。野外ではバードウォッチングを始める時に「この鳥を搜してみよう」という積極性を呼び起こす使い方もできるし、まとめの段階で、どんな鳥を観察できたかについて確認するのに使うのもよいでしょう。表面のカラーイラストには名前が記していないので、私が子供対象に使う場合は、イラストだけ示して、クイズとして名前を当ててもらおうようにしています。バードウォッチング中は静かにしていなければならないことが多いのですが、このように教材を使って課題設定をしたり、クイズで盛り上げたりすることで、子供たちを受身にさせず、めりはりを付けることができます。

なお、カラーイラストの裏面には、種類ごとの「目」「科」「英名、学名」「大きさ」「識別点」「分布」「環境」「繁殖」「食性」「行動」「声」「その他」が表で記されており、表面のカラーイラストを示しながら裏面を解説のアンチョコとして活用できるようになっています。

「野鳥かみしばい」の手引

この教材は、以前、日本野鳥の会で制作した指導者のための野鳥観察補助セット「山野の鳥50」「水辺の鳥50」という2巻を、私が監修して再構成した

ものです。山野でも水辺でも活用できるようにして種類を絞り込んだりフィールドマナーを紹介するカードを加えたり、携帯に便利なケースを工夫したりと様々に改良したつもりですが、一番力を入れたのは「教材をどのように使ったらよいか」を解説した手引の充実です。

内容を以下に抜粋して紹介します。

『探鳥会の進め方』という項目では、探鳥会を例にバードウォッチング指導や自然観察会の企画から実施までにどんな点に留意したらよいかを書きました。要点としては、「目的・目標、対象によって、場所や季節を決めること」、「テーマを決めることで教育効果が高まること」、「指導や進行の役割分担を人材育成に結び付けることができること」などです。

『観察や解説のアドバイス』では、まず、野鳥や自然から感動を得られる人は、誰でも指導的な役割（ここでは案内人と呼んでいる）を担えるはずだという考え方が書いてあります。指導者の知識や解説の内容以上に、指導者の誠意や、子供自身の体験が大切だからです。

次に『野鳥から自然環境へ』で野鳥の暮らしやその背景から、自然のしくみや地球全体に視点を広げる方法を紹介してあります。『いかに興味や関心を持ってもらうか』では、バードウォッチングのベテランは自分の感覚を基準に据えて失敗することが多いこと、『案内人を楽しむ』では「自分を生かす」「みんなで取り組む」意義、『解説内容の例』では見分け方の解説の注意点に触れてあります。

つまり、この「野鳥かみしばい」は、バードウォッチング指導に関わっている人だけでなく、これから関わってみようという方にも使っていただけるように、基本的な考え方を押さえたつもりです。

生活の場面

地球という星の「共存のしくみ」が理解されれば、あとは慣れと知識によって、環境と季節から、そこにどんな野鳥がいるかが予想できるものです。これは、野鳥の見つけ方や見分け方にも関係しますが、手引には、『場所や季節ごとの野鳥リスト』を掲載しました。これを参考にすると、指導の初心者でも、どんな鳥がそこにいるのかを予めつかむことができるでしょう。

バードウォッチング指導は、ともすると種類ごとの解説や見分け方の解説に終始してしまうことがあります。それは、愛鳥教育や環境教育の視点からは

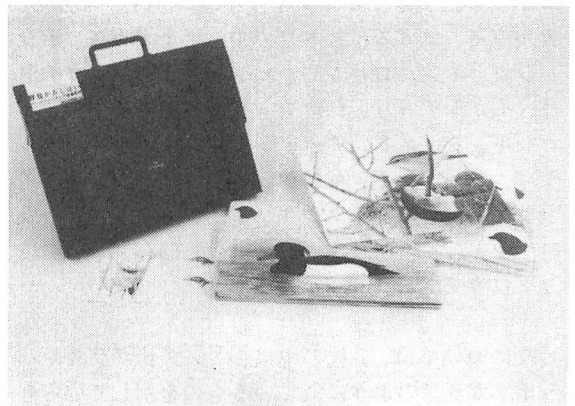
第一歩に過ぎません。いろいろな種類の野鳥が暮らしていることから、さまざまな生物や環境との結び付きに展開したいものです。

この「野鳥かみしばい」は基本的には種類ごとのイラストなので、種類以外の解説ができるイラストとして「繁殖の様子」「採食の様子」など、イラストが描いてある野鳥たちの生活の場面ごとのリストも加えてみました。

例えばカイツブリのカラーイラストに雛が描かれていますし、イカルチドリでは親鳥と卵、ツバメやシジュウカラでは巣、ホオジロではさえずっている様子、スズメでは求愛などが描かれており、それぞれ繁殖の話に展開できるわけです。

手作りかみしばい制作のヒント

監修者として、一番のお勧めは『手作りかみしばい制作のヒント』で、手引の最後に2ページとりました。これは横浜自然観察の森のレンジャーによるもので、ボランティアとともにテーマを練って、ストーリーを考え、分担してイラストを描いて、みんなで解説に使っている事例紹介です。「野鳥かみしばい」のような既成品もどんどん活用していただきたいのですが、それぞれが工夫して紙芝居を作るのもおもしろいし、愛鳥教育にも生かせるのではないかと思います。



仕様：B4判カード形式、用紙両面P.P. マットラミネート加工、ポリバインダー綴じ、携帯ケース（約40×30cm）入り。B5判「利用の手引き」20ページ付き

価格：¥19,000（税込） 300部限定販売

※ お問い合わせは、(財)日本鳥類保護連盟（TEL.03-3225-3590）箕輪多津男まで。

「野鳥かみしばい」についての補足説明

常務理事 平田寛重

8～9ページに、監修者の安西英明氏に詳しく解説していただいているので、ここでは少し補足をすることに留めておく。

この紙芝居は、幼児を対象とした一般的なそれではなく、探鳥会や観察会等の際に、野鳥の説明や解説に使用することを意図してつくられている。絵は、本会では馴染みの深い松原巖樹さん、山本正臣さん、水谷高英さんらによる生態画である。

種類の構成は、街中・水辺・海岸・丘陵地で見られる鳥を中心に集められている。

(山野の鳥) トビ、チョウゲンボウ、キジ、キジバト、カッコウ、カワセミ、コゲラ、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、キセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、アカハラ、ツグミ、ウグイス、オオヨシキリ、センダイムシクイ、キビタキ、エナガ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、シメ、スズメ、ムクドリ、ハシブトガラス、ハシボソガラス(水辺の鳥) カイツブリ、カワウ、ウミウ、ヒメウ、ゴイサギ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、マガモ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、バン、オオバン、コチドリ、イカルチドリ、シロチドリ、メダイチドリ、ハマシギ、トウネン、アオアシシギ、オバシギ、ツルシギ、タカブシギ、キアシシギ、ソリハシシギ、イソシギ、チュウシャクシギ、ダイシャクシギ、ホウロクシギ、ユリカモメ、ミツユビカモメ、ウミネコ、セグロカモメ、カモメ、コアジサシ、アジサシ

絵については、1枚の中に、ハシブトガラスやハシボソガラスのように似ているものを示しているもの(写真1)。また、コガモやジョウビタキのようにオス・メスを示しているもの(写真2)。また、ユリカモメやハマシギのように夏羽・冬羽を示しているもの(写真3)。その他、シジュウカラやカイツブリのように繁殖の様子を示したもの(写真4)。メジロやヒヨドリのように採食の様子を示したもの(写真5)などが意図的に書かれている。

そこで、探鳥会の当日は、出現しそうな鳥の紙芝居を用意して出かけるとうい。

例えば、冬の公園の池(東京で言うならば、不忍池や井の頭公園等)で探鳥会を行う場合、カモ類やサギ類、カワセミ、セキレイ、バンなどの水辺の鳥の紙芝居を主に用意していき、オス・メスの違いやその意味、嘴や足の形態の違いから食べ物や採餌方法が異なること、種類や仲間によって環境を棲み分けていることなどを知ってもらい、鳥を通して自然のしくみを理解してもらおうように進めていけば、探鳥会は成功する。

添付されている利用の手引きには、探鳥会での紙芝居の使い方、探鳥会の進め方、観察や解説のアドバイス、環境ごとに生息する鳥とその解説、レンジャーの紙芝居体験記などがわかりやすくまとめられている。

なお、このセットは、内容としては一般的なものに限られており、体裁としてもすべて解説用の1枚ものである。そのため、地域によってはオリジナルなものを作る必要が出てこよう。また、自分だったら、こんなふうにしたかったことも探鳥会を指導していくと出てくるものである。

参加者を鳥の世界に引き込むもの、知らず知らずのうちに鳥を通して自然のしくみがわかるようなもの、物語的な続き物など、いろいろ工夫してみるのも、指導者としての勉強になるものである。そんな時にも、この紙芝居は大いに参考になる。

価格が19,000円ということで、若干高い気がしないでもないが、1枚あたりにすると370円程度である。耐水性のコーティング処理がなされていること等を考えれば安いとも言える。学校予算等で購入し、全校で授業等に活用してみたいかと思われる。

※ 購入ご希望の方は、日本鳥類保護連盟(TEL.03-3225-3590) 箕輪多津男までご連絡ください。その際、「愛鳥教育」を読んだとおっしゃってください。

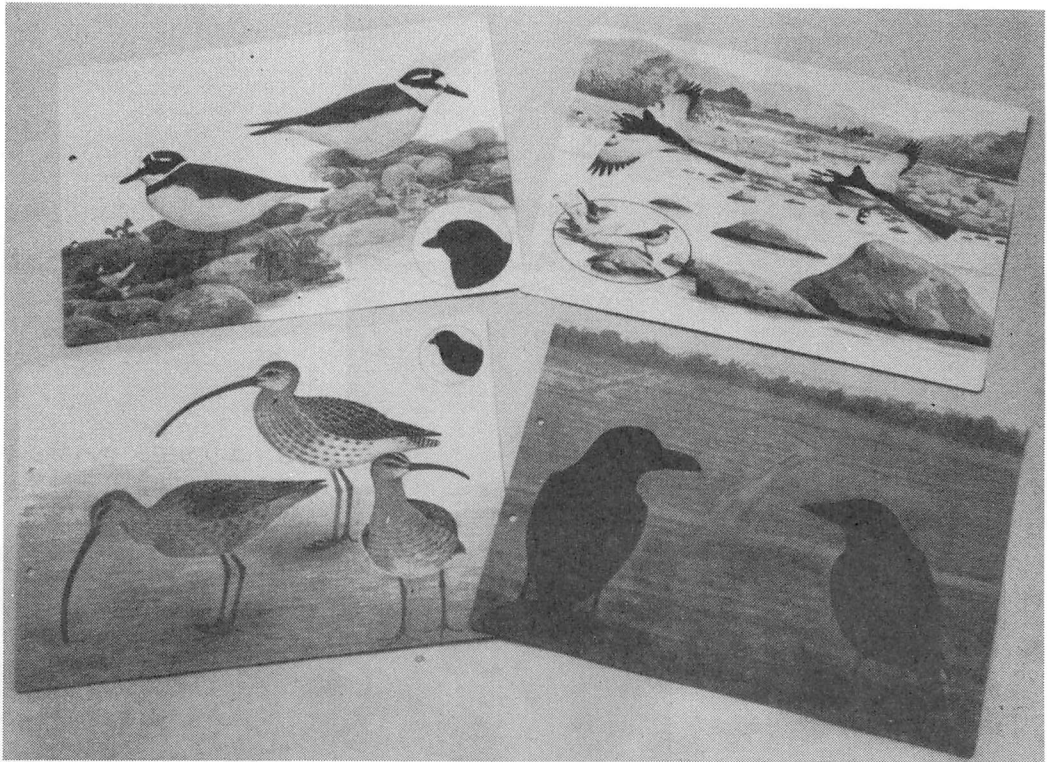


写真1 ハシブトガラスやハシボソガラスのように似ているものを示しているもの



写真2 コガモやジョウビタキのようにオス・メスを示しているもの

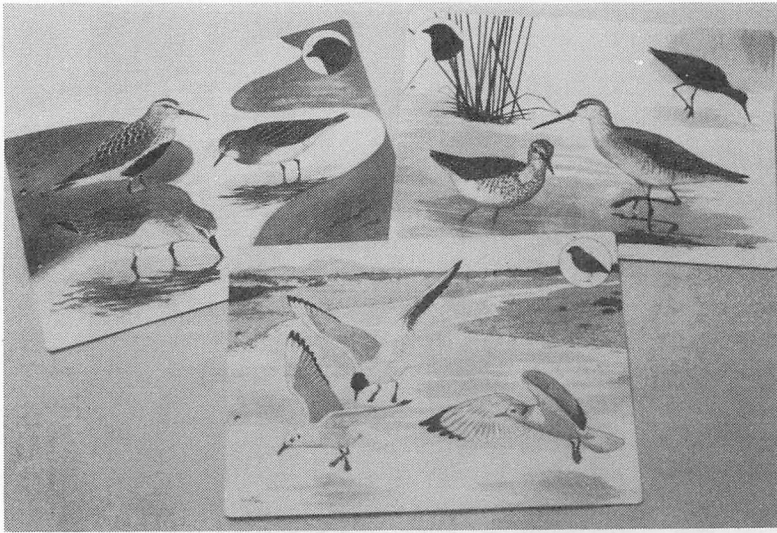


写真3 ユリカモメやハマシギのように夏羽・冬羽を示しているもの



写真4 シジュウカラやカイツブリのように繁殖の様子を示したもの

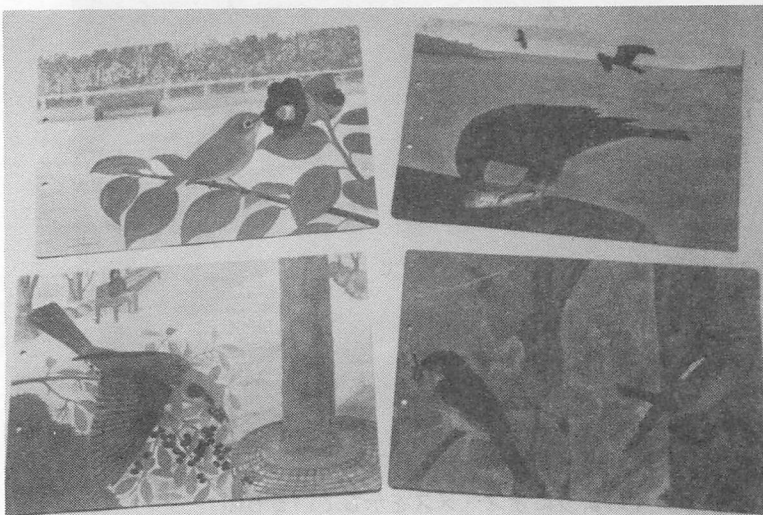


写真5 メジロやヒヨドリのように採食の様子を示したもの

論 説

環境教育のすすめ方

常務理事 平 田 寛 重

6月半ばに中教審の答申が出された。その中に環境教育にかかわる内容についての記述があるので、今回はそれについて考えてみたい。

基本的には、ベオグレード憲章にうたわれていることがメインになっている。展開としては、「環境から学ぶ」「環境について学ぶ」「環境のために学ぶ」という三つの視点が打ち出されている。これは、古くは、「親しみ・知り・守る」であり、新しくは、“IN, ABOUT, FOR NATURE”と基本的には同じである。

それから、「子どものうちから環境に働きかけて主体的に生きる子どもの育成」をかかげている。

留意事項として、「環境問題が学際的な広がりを持っているので、あらゆる教育活動において、連携・協力を図りながら進めていくこと。」

「自然環境と人間とのかわりや自然に対するおもいやり、環境保全への取り組みやよりよい環境創造に取り組もうとする実践的態度の育成。」

「体験学習の必要性、総合学習での取り組みなど、実践的な内容の充実。」がうたわれている。

ついで、それらをバックアップするための指導者の充実や、専門家の登用（非常勤）、地域における体験型学習機会の充実などが挙げられている。

このような環境教育を全体的な領域で取り組んでいく方法は、一見正当派のように思われる。しかし、コントロールする機関がなければ、個々が勝手な解釈で取り組むだけに終始し、最終的には統一性のないままに終わってしまう可能性が高い。

きちんとした目標を立てることはもちろんのこと、それを達成するために、どの領域で、どの単元で、どのように実践していくのか。そして、そういった実践が、それぞれにどうつながっていくのか。そのあたりの所を綿密に計画を立て、割り振りしていくことによって、初めて成果をあげることができる。

また、それと並行して、環境教育をどう考えていくかという基本的なラインを押さえる時間を設けることが欠かせない。それがないと、実際の指導によって得られた成果からのフィードバックができ

ず、冷静な評価や判断ができなくなる恐れがあるからである。

冒頭に示した三つの取り組みについて、それぞれ発達段階に応じてどう細分化・教材化していくのか、今後の詳細な発表が待たれる。

それから、自然環境との接触がうたわれているが、それはまず、身近な所での日頃の活動を充実させることから始められなければならない。自分が生きている状況の中で、まずは身近なことに目を向け、自分の問題として取り組んでいくことが必要である。子供たちは、日頃の自然と接する活動を通して、自然への関心を高め、関わりを深め、認識を持つようになり、適切な行動がとれるようになっていく。

その意味で、各自がフィールドを持つことが環境教育の第一歩となる。そのフィールドで過ごす中から、自然への関心が高まり、自然のしくみを学び、その自然に愛着がわき、守る気持ちも意味も理解するようになり、そこから環境を守る行動も導き出されていく。

従って、教科領域を越えた総合学習を取り入れ、学校の外に出て、意識的なフィールドワークの体験を通して学んでいくといったことが必要になってくる。しかし、従来の教科教育による指導観を変えないと、このような取り組みは不可能である。

一番効果的なフィールドは、最も身近な校庭である。森や水辺を再構成し、教育園化するとよい。そして、レンジャーを置き、インタープリターとして、子ども達と自然との橋渡しをしてもらえるようにすると更によい。

というのも、現在の教員一般のレベルでは、たとえ校庭が自然教育園となっても、子供たちに喜びを伝えられるインタープリターとしての能力は乏しい。教員養成課程での不備は言うまでもないが、環境教育の初期段階における生物主体の内容は、ほとんどの教員がその扱いを苦手としており、研修も一朝一夕にできるものではないからである。

今回の答申を受けて、学習指導要領がどう改訂されるのか、興味あるところである。せめて、教育園の設置義務（校庭の？%以上の緑地）を期待したいが、如何なものであろう。

本の紹介

アニマルレスキュー教本（野鳥編）

常務理事 平田 寛重

学校現場でも、場合によっては、野生鳥類を飼養する機会が突発的に発生する状況がある。そんな時、あるととても重宝する虎の巻的な内容の本2冊を紹介しよう。

アニマルレスキュー教本（野鳥編）,

野生動物救護研究会, エコネットワーク刊

A5版24ページのこの冊子は、傷ついた野鳥や迷子の雛の救護について、実際に現場で治療をしている方々が、自ら作り出したノウハウを要所に押さえながら作ったものである。

応急処置、給餌、治療、看護、リハビリ、野生復帰に至るまで、イラストを要所に効果的に使いながら、簡潔明瞭に説明されている。

1部400円、送料190円。10部以上の場合、1部300円となり、送料もサービスされる。

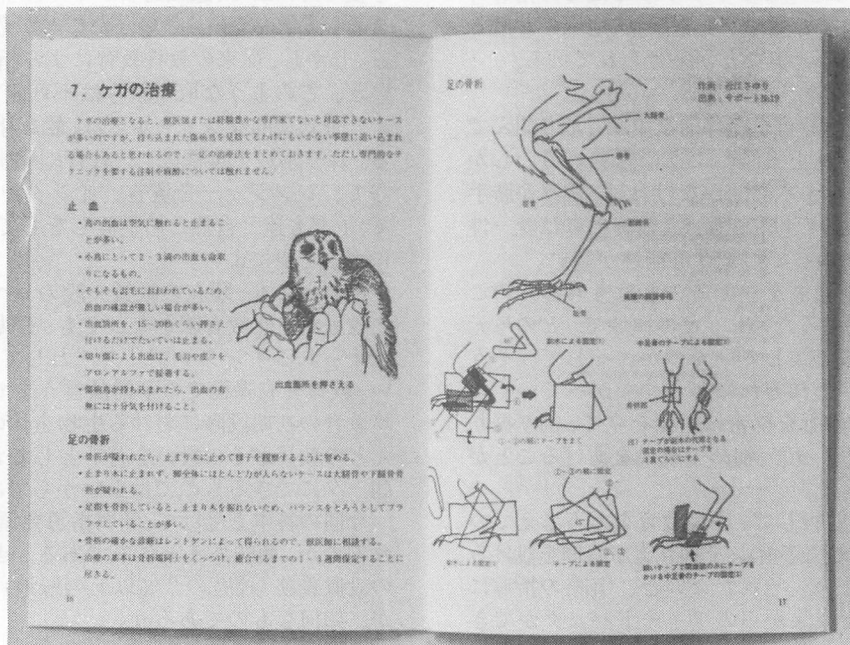
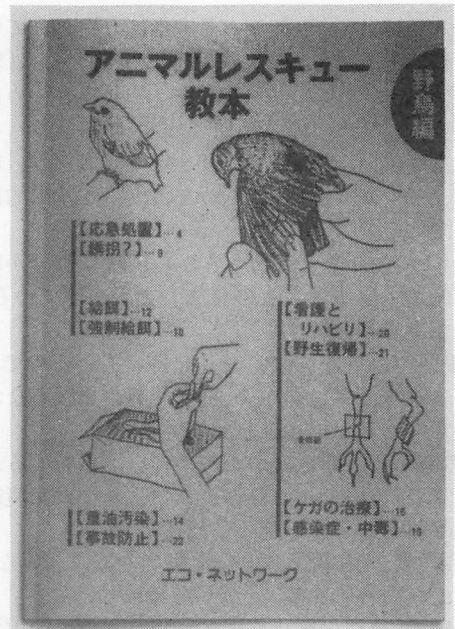
購入については、電話、ハガキ、FAXのいずれかで下記まで申し込み、商品到着後に同封の郵便振替用紙で払い込む。

《申込先》エコ・ネットワーク

〒060 札幌市北区北9条西4丁目

エルムビル8階

TEL. 011-737-7841 FAX. 011-737-9606



野生動物救護ハンドブック —日本産野生動物の取り扱い—

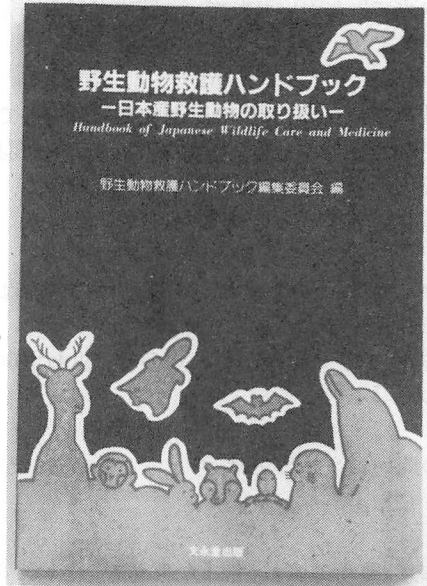
野生動物救護ハンドブック —日本産野生動物の取り扱い—
野生動物救護ハンドブック編集委員会編， 文永堂出版 B 5 版 326ページ 8240円

この本は、野生動物全般にわたっての救護のノウハウが紹介されている。執筆者は、獣医がメインであるが、フィールドワーカーを兼ねた研究者もいる。

内容は、野生動物救護の意義と課題、野生動物救護の実際・総論、各論になっている。

総論は、応急処置の方法、輸送方法、食性と給餌法、野生復帰と追跡調査、データの収集法、病理解剖学となっている。

各論は、アブラコウモリ、ニホンザル、ムササビ、タヌキ、ニホンジカ等の陸棲哺乳類、ミズナギドリ類、ウミツバメ類、アホウドリ類、サギ類、カモメ・アジサシ類、カモ類、ワシタカ類、フクロウ類、ドバト・キジバト、ツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ類、シジュウカラ、メジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ類、オナガ、カラス類、ウグイス類、ヒタキ類の鳥類、イルカ類の海棲哺乳類、ウミガメ類である。内容は、動物園等で保護した動物の飼育記録を活かした構成になっており、実践的なノウハ



ウが紹介されている。また、写真やイラスト等を要所に使い、効果を上げています。



鳥たちの街ものがたり Part 4

“お濠のカルガモ”だけがカルガモじゃない！

せたがやトラスト協会 佐々木 晶 子
常務理事 杉 浦 嘉 雄

今回の主人公は、“お濠のカルガモ”とか“皇居のカルガモ”とかいわれて、一躍有名になった「カルガモ」です。

6月初めの夕暮、野川のほとりを私が一人で散歩していたときです。やわらかな茂みから、一羽の地味な茶色のカモが10羽のヒナを引き連れて、目の前を通り過ぎようとしていました。

— わあ、かわいいですね。あなたはの名前は、カルガモさんですね。
(と、あんまりヒナがかわいいので、思わず声をかけました。) —

僕の問いにカルガモは、ちょっとためらいがちに答えました。

「まあ、そうですね…。『カルガモ』というのは、私たちのグループの名前にすぎません。例えば、あなたたちを『ニンゲン』というのと同じですわ。ですから、私自身の名前は、ゲエグエッグエっていうんですよ。」

彼女の声は少し低めでした。

— ごめんなさい。勉強不足なのか、僕には、あなたの肝心のお名前が、いつものゲエグエッグエっていうカルガモの鳴声にしか聞こえないんです。だから『ミセス・カルガモ』と呼ばせてください。—

彼女は、にっこり笑うように羽をばたばたさせていました。

「もちろん、けっこうですよ。」

彼女が親しみやすそうだったので、僕はこの機会だと思ってこういいました。

— ところで、お近付きになれたのでいろいろお聞きしたいのですが、いいでしょうか。—

「まだ時間がありますから、どうぞ。」

こうして僕は、カルガモのお母さんとすっかり仲良しになったので、いろいろ聞くことができたのです。それを皆さんにもお伝えしたいと思います。

— カモの多くは冬にしかみられない冬鳥ですよ。でも、あなたたちは、一年中ここにいるようですね。—

【ミセス・カルガモ】

ええ、そうなのよ。カモの多くは、シベリアやアラスカなどの北の国から秋にやってきて、日本で冬を越す「冬鳥」なんです。私たちカルガモは、一年中この日本にいて、卵を産んだり子育てをしたりするんですよ。

— ああ、だから“皇居のカルガモさん”も、かえったばかりの子どもを引き連れて、引っ越ししたりしてるんですね。今日お会いするまでは、カルガモっていうと、てっきりあの有名な皇居に住んでるものだと思っていましたよ。—

【ミセス・カルガモ】

とんでもありませんわ。あの皇居のカルガモ一家は特殊な例ですわ。“お濠のカルガモ”だけが、カルガモじゃないんですよ。

今私の住んでいる世田谷区内のカルガモの鴨数は、「世田谷区住鴨登録台帳（たしか？ミセスカルガモがそういったような気がしました。）」によると、夏の時期には、約1000羽。冬の時期には、約500羽が登録されていますの。

— えっ、カルガモさんは、世田谷にそんなにいたんですか。知らなかったなあ。驚きましたよ。

ところで、世田谷区内のニンゲンの数は、「世田谷区住民登録台帳」によると約76万人です。特に冬とか夏とか分けていないのですが、カルガモさんの場合はどうして時期によって分けて登録しているのですか。しかも、数もずいぶん違うようですが。

【ミセス・カルガモ】

それは、ニンゲンのあなたには、すぐにはわからないかも知れませんが、そうですね、私たちの生活の様子をお話すればわかっていたいただけるかもしれませんね。お話してみましょかしら。

私たちは冬を無事越すことができれば、春先に結婚しますの。そして、川のほとりの目立たないやわらかな草むらに子どものための巣をつくるんです。

枯草でつくった簡単な巣ですが、そこに卵をだいたい10個くらい産みます。あら、驚いていますわね。もちろん、一度に産むんじゃありませんよ。毎日1個ずつ産むんですのよ。

その10個の可愛い卵を一生懸命温めますが、全部かえるとは限らないんです。やっぱり一番最後の卵の子がかえらないことが多いんですの。

やっとかえったヒナたち(コゲ茶でお尻にクリーム色の斑点があってそれはもう可愛いんですの)を私は必死に守って大きくしようと頑張るんですよ。でもね、ヒナの半分は大人になれないんですの。それを思い出すと私はとても悲しくなりますわ。

私たちには、たくさんの天敵がいますの。上空からはヒナを狙う大きな嘴のカラスがいて、横からは素早い野良猫がやってきますし、茂みからすっつと出てくる青大将がいるんです。

そういう敵からヒナを守って大きくすることはとても難しいことなのです。

そんな危機を乗り越えて大人になって、私と同じくらいの身体になっても、まだ経験が浅い若いカルガモたちは、やっぱり野良猫やカラスにやられたりしてしまうんですよ。秋口に一人前になるんですが、残念ながらその頃には10羽いた私の子どもたちは、せいぜい3、4羽になっていますの。

これで私たちの「世田谷区住鴨登録台帳」が夏と冬に二度の登録があって、数が違うのがおわかりいただけましたかしら。

私たちは、ニンゲンというあなたたちのグループよりも、とても厳しい生活を送っていますのよ。

— そうなんですか、本当に大変な生活をおくっているんですね。僕たちニンゲンに何かできることはありますか。例えばエサをあげるとかですが。—

【ミセス・カルガモ】

いいえ、私たちの主食の草の実などは、この辺に充分あるんですよ。だからもし、何かしていただけるのならお願いがありますの。

私たちには、巣を作り、卵を産み、子どもを育てるための草むらがとても大事なんです。ですから、ニンゲンにとっては、つまらない草かもかもしれませんが、私たちには生きていくための大切な場所ですから、大切にしてほしいんです。

意味もなく草むらを「景観が悪い」とか「虫がわく」などの理由で無くさないでほしいんですの。私たちの生命を育んでいる場所だということを心の隅にでも留めておいてくださいね。

それから、私たちには憎いだけの野良猫のことなんです。あの猫たちも、もとはといえばニンゲンが飼っていたということを聞きました。あの猫たちも必死にエサを探しているんですね。ですから、一度飼った猫を捨てたりしないでくださいね。

あなたたちニンゲンには、つまらない小さなことかもしれませんが、カルガモを代表して、私からお願いしますわ。

— ああ、わかりました。そのくらいのことでしたら、僕たちも協力できると思います。他の皆さんにもお願いしておきます。ミセス・カルガモもお元気であってくださいね。



●カルガモ
大きさはカラスより大きい。オス、メス同じもよう。くちばしの先の黄色と、オレンジ色の足が目立つ。ヒナをたくさん産んだ親子の姿が、街なかの小川でも見られる。

座談会

平成4年度版小学校理科6年教科書と愛鳥教育

出席者

常務理事 杉田優児 (学習院初等科)
常務理事 杉浦嘉雄 (せたがやトラスト協会)
常務理事 平田寛重 (伊勢原市立伊勢原小学校)
会長 江袋島吉 (元世田谷区立二子玉川小学校)
副会長 金井郁夫 (日本動植物学院講師) ※故人
岡本嶺子 (日本鳥類保護連盟)

杉田: 小学校の学習指導要領が平成4年度から新しいものになりました。理科教科の目標は、“自然に親しみ観察実験などを行い、問題解決の能力と自然を愛する心情を育てると共に、自然の事物現象についての理解を図り、科学的見方や考え方を養う”となっています。

これを受けて、学習指導要領の指導書には、“自然に親しむ事”、“観察実験などを行う事”、“問題解決の能力を育てる事”、“自然を愛する心情を育てる事”、“自然の事物現象についての理解を計る事”、それらを踏まえて“科学的な見方や考え方を養う事”というような項目が挙げられています。特に“問題解決”という部分が今まで以上に強調されています。この後に、各学年の目標について具体的に記述されています。

今日は6年の所だけを取り上げます。“生物の体の作りと働き及び環境を、相互に関係付けながら調べ、見出した問題を意欲的に追求する活動を通して、生命を尊重する態度を育てると共に、生物の体の共通性や環境との関係の見方や考え方を養う”とあります。

平田: 内容として悪くはないですね。

江袋: 人間の体もこれに入るのかな。

杉田: そうですね、生物の体という中に人体も入ります。

平田: 総則はいいのだけれど、具体的な内容になると、どうしてこれがそれを達成させるための内容なんだと思わせるようなものが多いですね。実際には総則に沿った内容をやろうとしても現場ではとてもやれない状況があるので、適当に部屋の中でできるようなことをごまかすことになるようにも思えます。

杉田: 6年生では、環境と結びつけて指導するこ

とが意図されています。

“人の体を他の動物や植物と比較したり関係づけたりして、人としての特徴や環境との関わりを調べることができるようにする。”というように、環境という言葉が出てきます。今までは動植物だけだったものが、人体というのが新しく入ってきました。人間も自然界の中の一員ですよということを意識させる内容になっています。

具体的には、環境の所では ア)イ)と二つありまして、イ)の方に“人は食べ物、水、空気などを通して、他の動物・植物及び周囲の環境と関わって生きている事を理解させる”とあります。もちろん、この他にも環境と関わる所は出てきます。

生物との関わりがメインになっていますが、水の循環や炭素の循環といった自然界のメカニズムの内容も出てきますので、そういったことを含めて、各社の教科書を見ながら話を進めていきたいと思えます。

《学研》

食べ物・水・空気の三本柱を忠実に受けた展開ですね。しかも人と動物と植物だけで環境となっています。

平田: 6年生になってやる内容かなと疑問に思う点がいくつかありますね。こういうものは低学年のうちにやっておいて、それが6年生になってまとめとして出てくるというのが筋ではないかと思えます。

杉田: 気体検知管というのが出てきています。細かいアンブルになっていて、端を折って吸引のポンプで空気を引いてやると、検知管の中に空気が通ります。検知管の中には二酸化炭素やその他のガスの濃度を発色剤の色で特定できるようになっています。授業の開始直後と窓を締め切って授業を行った終了間際の二酸化炭素の量の違いを意識させるというわけです。

杉浦: 今までは、植物についての二酸化炭素と酸素の関係はどう扱われていたんですか。

杉田: 今までは根拠もなく決めつけていましたが、今回からこの気体検知管というもので検証を一応行うようになりました。

平田： 導入法が逆なんじゃないのかな。

杉田： ここで数字を出しても地球全体に話が及んでいるのかといえそうではないですね。

平田： 何かテストのためにやっているような感じがしますね。

杉浦： その後は食べ物話になっていますが、これは“よく見れば他の生き物ではないか”ということを行っているわけですね。

杉田： そうです。私たちのイメージしている環境との関わりとは、ずいぶん違うように思います。

杉浦： 生態系の基礎にはなっているとは思いますが。

杉田： そうですね。しかし、環境教育や自然を愛護する気持ちだとかいったことに、これで到達できるのかどうか疑問に思います。

平田： こういうことをやっていくと自然を学ぶということがおもしろいと思わなくなりますね。

杉浦： 各単元の指導時間は指導書で決められているんですか。

杉田： いいえ。ただ、他の内容と調整していくと、大体3～5時間ぐらいの展開になるということのようですね。

平田： ここに、金華山の隔離された中での生物どうしのつながりというのがあります。これは生態系の説明には意味があるのだろうけど、こういうことをやって子供にわかるのだろうかと思えますね。

杉浦： これは、資料として入っているわけですよな。

杉田： そうです。

平田： 確かに、読んでわかるものなのですが、では自分の身の周りではどうなのかということが抜けています。また、生き物が生き物を食べるということは、科学の学習としては当然のことではありますが、残酷とかかわいそうということに発展していく可能性もあります。愛護という面と自然の仕組みを把握するということ、教師がよく理解していないと、いい生き物・悪い生き物ということになってしまっ、自然がどういうものかを認識できないまま終わってしまう可能性があります。

杉田： ただ、ここで意図されているのは、生態系を地球レベルで把握することは難しいので、小さな自然の中での生態系として説明しているわけですね。

杉浦： まあ、この場面ではかわいそうとか、いい・悪いとかは出てきませんが、子供たちから言われたらどうするんでしょうね。

平田： どこまで子供たちが冷静に見られるかということですね。でも、教師側の中には、子供たちが冷静にそういうことを見つめるのはよくないと思っている人もいます。私自身も、こういうことは、形としてはわかっているけれども実際の指導はなかなか難しいものです。

杉浦： 食物連鎖でつながっていることとかの内容ですか。

平田： そうです。実際には見てもいないわけだから、知識の押し売りなんですよ。個人の感覚として理解できない部分ですから、難しいですよ。

杉田： 生態系の見方を確立していくためには、計量化された生態学が欠かせませんね。例えば、一匹の牛を養うのに草が何トン必要なのか、そのためには草地は何平方メートル必要でといった内容です。そういうものの理解の上に立つと、人間一人養うのにどのくらいの草地が必要かとか、そうするとそういう環境の中にどの程度の生物が入り込むのかといった方向に話が進みます。たくさん生物の複雑なつながりまでは見えないにしても、そういったことの中に驚きや感動とかが見えない限り、自然を大切にしたい心は生まれれないのではと思います。

《学校図書》

杉田： 自然とのつながりということで、まず大きい自然から見せる方法をとったのでしょうか。いきなり宇宙が出てきたり、大自然の写真を載せたりしています。水の概念図なんかも載せています。そこから植物に日光を当てると、二酸化炭素が減って、酸素が増えるというのがあります。

平田： ここには、いろいろな生き物が食べ物によって分かれているということが書かれていますね。

杉田： ただ、結論としては、動物の食べているものは草ですよということにとどまっていますね。6年の最後のまとめということではあるのですが、先程、平田さんも言われていたように、野外に出ず話し合いで済ませようということになってしまっています。

平田： ザリガニを飼っている時に何を食べていたかとか、草を食べているものにはどういうものがいたとか、肉を食べているものにはどういうものがいたとか、子供の経験の中にもたくさんのことがあると思うんですけどね。

杉浦： 生き物の種類としては、動物園にいる種が

多いですね。

杉田： 動物園種の方がなじみが多いということなのでしょうね。

平田： 人間が工夫して火を使ったり、刃物を使ったり、或いは狩猟道具を作ったりしたことで、いろいろな物が食べられるようになったという内容がありますね。

杉浦： いきなりこれが出てきたわけが、よくわかりませんね。

杉田： これは、人が人になったわけというか、自然から外れて野生生物と違ったことをするようになって、人間という特殊な生物になったということの下敷きにしたいのかもしれませんが。

平田： 自然とうまく共存できないということがなぜなのかということになると、難しくなりますね。また、残さないで食べるということにつながるものなのでしょうか。

杉浦： 項目だけ見ると、“自然の中の人間”と書いてはありますけれど。

杉田： 都市に住んでいる人間が、郊外に行くと“自然はいいなあ”と感じる。しかし人間は木を切り出して資源として使い、自然を破壊することもあるが、一方で植林もしているという、人間と自然とのつながりを扱っているわけではあります。

平田： よくわからないですね。

杉田： これだけ見ていると言いつにしか見えませんね。

金井： 結局、書く人間がわかっていないんですよ。

平田： 何が言いたいのが全然わからないですね。

杉田： その上で“豊かな生活を”とも書いてあります。

金井： まあ、いいことは言うけど。

《教育出版》

平田： “いろいろな生き物がいるけれど、ただバラバラに生きているのかな”という導入で始まります。

杉田： 次は、水の循環ですね。植物の水の循環、自然界の水の循環、人体の中でも水はあるんですよという所でしょうか。その後、気体検知管が出てきて、植物の二酸化炭素と酸素の関係が取り上げられています。

金井： これは、どれぐらい使われているの。

杉田： 今回の教科書から初めてですね。

杉浦： 新しいですよ。

平田： 話が跳びますが、この絵はどうしてムシクイなんでしょうかね。“ムシを食べるからムシクイ”といっても身近な鳥ではないのだから、ツバメでいいんじゃないかと思います。

杉浦： その次にチョウゲンボウとかが出てきますが、ずいぶん野生のものが出てきますね。

平田： この、イモムシが一杯キャベツにたかって、知らないうちにみんななくなっちゃうという絵も、ビデオを撮っていればわかるのだろうけど、実地体験をしようという所にまでは行ってないですよ。

杉田： 話し合いだけで済ませている感じがしますね。

金井： ここに釧路湿原が出てきますが、いないんじゃないかなと思う動物も出てくるね。

平田： 教科書も嘘が多いですね。

杉田： 改訂版で直っている可能性もありますけれど。この後、自然の中の概念図と人としての関わりがっていますね。

平田： ここなどは、飼育種がほとんどだから環境と結びつかないんじゃないかな。自然環境がなくても施設があれば飼育・栽培はできるわけだし。

杉浦： 植物を育てるのであれば水耕栽培で十分できて、土がなくてもいいんじゃないかということになってしまいますね。

《啓林館》

杉田： これは給食からの導入ですね。それと水です。生活排水や下水処理場の話も出てきていて、環境汚染の話につなげています。

杉浦： ここぐらいじゃないですか、環境問題が入ってきているのは。

平田： そうですね。

杉田： ここから空気の話も入ってきています。

《大日本図書》

杉田： 大きい自然の写真を入れてきてますね。

平田： ホウセンカは、扱いが簡単なんですか。

杉田： 吸水がよく、導管部も観察しやすい素材ではあります。

金井： それは瞬間的なアイデアであって、あまり意味がないですね。それと、キタキツネをこちらで見ると、これは流行なのかなあ。

平田： これはハタネズミですか。

金井： ちょっとわからないのですが、人工的なものに乗っているからドブネズミかな。でもノネズミみたいだな。

杉田： ここからまとめに入るわけですが、いきなり“かけがえのない…”という風に始まってしまいます。

金井： 人との関わりだからといって、栽培種ばかり載せるのはどうかと思うね。

平田： 家畜や栽培品種が自然かという問題につき当たるわけですね。また、チーターがトムソンガゼルを捕っている写真が、本当にある世界だと子供たちがどこまで具体的に認識できるだろうかということも考える必要があると思います。

《東京図書》

杉田： また気体検知管が出てますね。

平田： 酸素検知管と二酸化炭素検知管と別々なんですね。

杉田： そこから食べ物になって給食になっています。

金井： カレーがいいんですかね。

杉浦： 子供が好きだからじゃないですか。

平田： どこから来ているかというのが載っていますが、これは社会の勉強になってしまいますね。

杉田： 食べ物が終わって水ですね。植物の水と生態系の中の水の循環というのがあります。

金井： ツルがいろいろ使われていますね。おめでたいからかな。

杉田： 特にタンチョウが多いみたいです。

平田： ラムサール条約の関係ですかね。

杉浦： 流行ですから。

金井： 編集者側の主張が見えてこないですね。

杉田： それの一つの原因として、教科書の検定のシステムが変わったことがあるように思います。従来は、2回検定がありました。第1回の検定で問題箇所が付箋が付けられるので、それを直して2回目の検定を受けるわけです。しかし、今回は、1回の検定しかありません。1回しか検定がないということは、3・4・5・6年生の教科書の4年だけダメということもあり得ることになります。セットでなければ教科書自体売れませんので、それを避ける意味で、編集者側も無難な線で押さえたという感じがします。

金井： 教科書を見ていても子供たちと一緒にやってみようという意欲がおきないね。

岡本： 自然が遠すぎるという感じなのかな。

杉田： それは、場所がということですか。

岡本： そうですね。出てくる種類が動物園でしか見られない種が多く、身近な生態系とは違ったものばかりですから。

杉浦： 後は、栽培関係ですからね。

杉田： 野外に出て行って“自然っていいなあ”と思える風景ではないですね。

平田： 生態系についての科学的な見方の初歩を何とかつじつまを合わせる感じで書かれていますね。

杉田： つじつま合わせだから、興味・関心・おもしろさがなくても、食べたり食べられたりする関係が記述できていればいいという感じがします。

岡本： 理科の授業では、野外に出て身近なものについて勉強するという事はないんですか。

杉田： それはやりようなんですよ。教科書によっては、野外で観察してみようというような展開をしているものもありますが、大体は自分たちで栽培したものの観察で終わっています。

金井： この教科書に従って授業を行うならば、写真だけを使って後の文章は無視するんだね。私の授業はそんな感じだったな。

《全体を通して》

杉田： 各社の展開を概観してきましたが、それらが愛鳥教育の観点から見てどうなのかということについて話し合ってみたいと思います。

金井： この中で愛鳥教育に使えるものがあるかないかという所なのかな。

杉浦： 環境教育をやっていく時に、原体験というものが欠かせないように思います。それを押さえなければ、環境教育にはつながっていきませんね。

杉田： 教科書に書かれているものは、自然のメカニズムだけであって、科学の初歩としてまとめただけのものですね。

金井： 学校によっては、学校に草花園や樹木園を作って原体験させている所もありますけど。

杉浦： 餌台をおいたり、ホタルの飼育などをしてる所もあります。

金井： 私は、下手なものを作るよりも田圃を作った方がいいような気がします。

岡本： しかし、そういったことをする先生がいないと…。

金井： そうなんです、熱心な先生がいても5年くらいで変わってしまいますからね。

平田： お金かけて作ってみても、的はずれな場合もありますね。

杉浦： たまにそういう例を見かけると、がっかりしますね。

平田： “教材園は、地域の自然を教師自ら理解し、教材としての活用を図るとともに、必要な自然を校内に取り入れ、教材園などを設置して、児童がそれらに触れやすくする努力が必要である” というような記述がありますが…。

杉浦： 記述があるんですか。でも、実際は、栽培と実験用に作られているわけですよね。

平田： 教員・管理職・周辺住民の理解等が得られなければ難しいこともありますから。

杉浦： 雑草園くらいの簡単な所から始めればいいんですよね。

杉田： 児童にとっての自然の存在感の希薄さを教材園によって埋めようということなのでしょうが、やはり外に出て自然そのものを学ばなければいけないように思いますね。

杉浦： 小さい教材園での体験ではちょっと足りません。教科書に“もうちょっと身近な自然に触れてみよう” という感じは出せないのでしょうかね。

岡本： このままでは、知識で終わってしまいますよね。

杉浦： 先生側が、もうちょっと勉強をしておかないと。教科書だけで教えていたら本当に知識だけですよね。

杉田： 話し合いでまとめをし、それで終わらせようとしています。実験といえば、せいぜい気体検知管ぐらいなものです。自分たちで自然のしくみを調べるという活動が欠けているように思います。

平田： そういうことを小学校の教員に要求するのは、難しいように思います。自然のことを科学的に教えるのは、小学校の教員レベルじゃ無理でなのはとも思います。

杉浦： 動植物の名前を覚えるだけでは、ダメですからね。

平田： 3～6年の教科書でのつながりがなさすぎるんですよ。種子散布と根と花の関係なども細切れになっています。そういうのがつながるように教科書に書かれていれば、植物を見るのも楽しいですよ。

しかし、もし虎の巻にこんなことをしてみなさいと書いてあっても、教員に実体験がないと教えられ

ませんね。

杉田： 学習指導要領の内容としては、植物・動物などそれぞれに学年を通しての流れは意図されているのですが、一つ一つの項目を忠実に指導したとしても、流れがスムーズとは言い切れないようです。

平田： 自然に親しむということは、理科の教科書とは別に組むしかないのかなあ。

杉田： 環境教育の別番組を組んだ時、果たしてその意図に沿った番組が組めるんでしょうかね。

金井： やはりそこでも、教員の力量が問われるわけですね。

杉田： 6年生の最後に子供たちに、この程度ものは持っていてもらいたいということはあるんですか。

平田： 理科を学んだということではなく、小学校を卒業するに当たってこういうことが必要というのは考えたことがないですよ。

杉浦： 何が必要なんでしょうね。

平田： 例えば、生き物に触ったことがあるとか。

杉浦： たしかに、原体験は必要ですよ。

平田： 今の時代にあっては、五感を使って何か経験をしたということは最低限必要でしょうね。それで理屈はどうのこうのというのは、知っても知らなくてもいいことなのかなあという感じがしています。例えば、植物を見てきちんとスケッチができるとか、大事な点を押さえられる視点が育っていればよいわけです。

金井： スケッチさせると、いろいろですよ。幼稚園クラスから高校クラスまでいるからね。

平田： 下手な子供に書かせるのがいいことなのかという感じにもなりますが。

杉田： 私は、実物をたくさん見せることに重点を置いています。

金井： ルーペや顕微鏡などの実験器具を正確に使えるといった技術的に身につけておいてほしいことはありますが、何が必要かという内容になると難しいですね。子供によって理解度の違いもあるし、理科系がきらいな子もいるしね。

平田： 他の教科についても言えることですが、大人になって何が必要かということになったらわからないですね。

杉田： 授業の中でどれぐらい、素朴に見つめ、科学的に観察し、そこからどれだけの情報を引き出し、そこから生活の中での関わりを考えることのできるような、物の見方を養うことができるかですよ。

金井：生き物の場合は、基本的には生きていくということをどのくらいつかんでいるかということですね。それは個性と能力で違うと思うんだよね。それと、生きているのと死んでいるのとの違いを知ることでも大事ですね。

杉浦：要するに、人間以外の動植物を見ることにより、自分と同時に生きているんだなと思うことですね。自分の子供時代には、“家の近くの泥水には生物は少なく、郊外の溪流に遊びにいくと生物が多い”という自然の豊かさまたいなものが原体験でわかっていたんですね。そういう素朴な価値観みたいなものはあった方がいいような気がします。

金井：教科書にも流れがあるらしく、水生昆虫がこの間まで流行っていて、その前が土壌昆虫だったんですね。

杉浦：いよいよ野鳥の時代がやってくるのかな。

金井：まあ、中学上がる時までは理科嫌いがいない程度にはしておいてもらいたいですね。

杉田：自然っていいなという気持ちをなくさないという感じですね。

平田：自然のおもしろさということは、伝えなくてはいけない。知識は備わってなくてもいいだろうと思います。愛鳥教育をやっていると、この鳥を覚えなさいではなく、おもしろいプログラムを行うことで、子供たちが関心を持ち結果的にわかっていくということがある。しかし、受け付けない子供もいるわけだから、それはそれでいいけれど、原体験だけは欠かせないということでしょう。

教員も、一旦教えたとなると子供たちに詰め込みを迫り、子供たちはオーバーフローしてしまう状況があるように思います。

杉田：覚えさせて、テストして点数つけなければならぬということになってしまうんですね。そうではなく、体験させるということに意味があるんですね。

平成7年度 収支決算報告書

(単位：円)

【収入の部】

項目	決算額
会費	489,000
売上	512,628
寄付金	2,000
連盟・補助金	917,730
受取利息	219
前期繰越収支差額	475,190
収入合計	2,396,767

【支出の部】

項目	決算額
会誌発行費	797,220
入会案内印刷費	355,350
通信運搬費	117,920
会議費	68,013
交際費	31,900
交通費	1,580
事務消耗品費	1,045
支払手数料	1,390
雑費	110,340
次期繰越収支差額	912,009
支出合計	2,396,767

前期繰越収支差額 ————— 475,190円
 当期収支差額 ————— 436,819円
 次期繰越収支差額 ————— 912,009円

上記の通り報告いたします。

平成8年3月31日
 会長 江袋 島 吉
 会 計 杉 浦 嘉
 事務局 真 輪 多 津

監査の結果上記の通り相違ないことを認めます。

監事 竹力 男
 村口 末 広

平成7年度 事業報告

事務局 箕輪 多津男

1. 「愛鳥教育」の発行

1. 47号(9月)、48号(平成8年4月)の発行

2. 内容

- ①「全国愛鳥教育研究会」元副会長の故金井郁夫先生の追悼特集を掲載した。
- ②愛鳥教育実践報告としてツバメの調査を特集した。
- ③愛鳥活動のヒントを掲載した。
- ④論説では「学校での探鳥会の在り方」および「環境教育と愛鳥教育」を掲載した。
- ⑤愛鳥教育のための新しい教材である『野鳥シート』に関する解説を掲載した。

2. 研修会

1. 夏期研修会

期日：平成7年8月18日(金)

場所：行徳野鳥観察舎

内容：①観察舎と保護区の見学

②講演「行徳野鳥観察舎と私」

千葉県行徳野鳥観察舎・蓮尾純子氏

2. 冬期研修会

期日：平成7年12月9日(土)

場所：兵庫島河川公園

内容：①多摩川での冬鳥のバードウォッチング

②大規模バードウォッチングの指導法研究

3. 常務理事会(開催日)

平成7年4月18日(火)、5月25日(木)、6月27日(火)、7月20日(木)、9月29日(金)、10月20日(金)、11月13日(月)、12月14日(木)、平成8年1月16日(火)、2月15日(木)、3月28日(木)

4. 「野鳥シート」の企画・販売

愛鳥教育に役立つ教材として、「野鳥シート～水辺で楽しむバードウォッチング～」を企画・販売し、各方面から好評を得た。

5. その他の行事・審査会への参加

<審査>

1. 第49回愛鳥週間全国野鳥保護のつどい

(長崎県)

平成7年5月14日(日) 江袋会長

2. 愛鳥週間ポスターコンクール及び全国野生生物保護実績発表大会審査会(環境庁)

平成7年10月20日(金) 江袋会長

3. 全国野生生物保護実績発表大会(環境庁講堂)

平成7年12月4日(月) 江袋会長

4. 愛鳥週間野生生物保護功労者選考会(環境庁)

平成8年3月15日(金) 江袋会長

<行事参加>

1. 財団法人日本鳥類保護連盟主催 テグス拾い

平成7年10月29日(日) 河口湖 江袋会長

2. 国会議事堂周辺巣箱かけ

平成8年3月6日(水) 江袋会長

3. 神奈川県野生生物保護実績発表大会

平成7年8月23日(水)

江袋会長、常務理事2名(平田、島田)

《自己紹介》

昨年8月末に(財)日本鳥類保護連盟に就職して以来、全国愛鳥教育研究会の事務局を担当いたしております箕輪多津男(みのわたつお)です。すでに10カ月程経過し、今さら自己紹介というのもおかしいのですが、改めて会員の皆様にご挨拶申し上げます。

私こと、前職では某シンクタンクに所属し、資源エネルギー問題および地球環境問題に取り組んでまいりました。ということで、ものごとをグローバルに考えることが多かったせいか、鳥類の中でも特に関心をもっているのは、地球の南半球にしか生息していないペンギン類や、ダチョウを中心とするいわゆる走鳥類などです。

愛鳥教育というのは、環境教育の中でも、具体性に富んだもつとも重要な分野であると思われまので、その発展のため皆様とともに努力してまいりたいと存じます。今後ともよろしくお願い申し上げます。(箕輪多津男)

「平成8年度夏期研修会」のお知らせ

野鳥観察のための1つのステップアップとして、どうしても通過しなければならないのがシギ・チドリ類。その渡り鳥たちのメッカといわれる東京湾最奥部に残された40ヘクタールの谷津干潟が、今回の研修会のフィールドです。

下記のとおり開催いたしますので、お気軽にご参加ください。

記

◆開催日時：平成8年8月16日 午前11時～午後3時30分まで

◆開催場所：千葉県習志野市谷津干潟

◆集合時間：午前10時50分（受付は午前10時30分から）

◆集合場所：谷津干潟自然観察センター
（〒275 習志野市秋津5-1-1 TEL. 0474-54-8416）

※「谷津干潟自然観察センター利用案内」参照

◆主要内容：

11:00 開会

レクチャー&ビデオ、施設見学

講師：自然観察センター 野中志朗氏

12:30 昼食（※ネイチャーセンター内に食堂があります。）

13:30 谷津干潟の野鳥観察

15:30 閉会

◆対象者：当研究会会員および関係者（会員の知人・家族等）

◆参加費：無料。ただし、センター入場料として200円。（小中学生は、100円。）

◆持ち物：筆記用具、雨具、観察用具など。
（自然観察センターの施設には、望遠鏡があります。）

◆連絡先：お申込み・お問合せは、「全国愛鳥教育研究会」事務局まで、ハガキまたは電話にてご連絡ください。

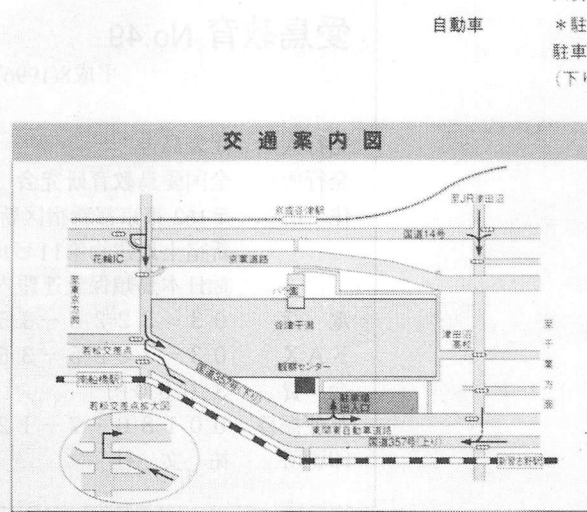
（〒160 東京都新宿区新宿2-5-5
新宿土地建物第11ビル5階
財日本鳥類保護連盟内
TEL. 03-3225-3590）

※雨天決行。申し込みされた方は、当日、直接、集合場所にお集まりください。

谷津干潟自然観察センター利用案内

- 開館日 火曜日～日曜日
- 休館日 月曜日
年末年始（12月28日～1月4日）
- 開館時間 午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
- 入館料 *高校生以上200円
*小中学生 100円
*団体（30人以上）は2割引

- 交通
- 電車バス *京成谷津駅より徒歩30分
*JR京葉線新習志野駅より徒歩20分
*JR京葉線南船橋駅より徒歩20分
*JR総武線津田沼駅よりバスで津田沼高校前下車バス停より徒歩10分
- 自動車 *駐車場は100台（普通車）
駐車場への出入りは国道357号（下り線）からとなります。



この観察センターシンボルマークは、シロチドリをデザインしたものです。

問い合わせ先

習志野市谷津干潟
自然観察センター
〒275 習志野市秋津5-1-1
Tel 0474-54-8416
Fax 0474-52-2494

編集後記

平成8年度第1号をお届けします。

今回は、「野鳥かみしばい」について、監修者の安西英明氏に、詳しく解説していただきました。観察会の指導教材として、ぜひ活用したいものです。

座談会の内容に関しては、今となっては古くなってしまいましたが、教科書をどう愛鳥教育に活用していくかは、これからも大きな課題の一つであることには変わりありませんので、敢えて掲載することにしました。

平成8年度版についても、いずれ検討してみたいと考えております。

(杉田)

お知らせ

常務理事の岩渕成紀氏が勤務する「仙台市科学館」で、「雁が渡る」の特別展が開催されています。

各種団体も展示コーナーを持っていますので、ぜひご覧ください。



愛鳥教育 No.49

平成8(1996)年7月31日

発行人 江袋島吉
発行所 全国愛鳥教育研究会
住 所 〒162 東京都新宿区新宿 2-5-5
新宿土地建物第11ビル 5F
(財)日本鳥類保護連盟内
電 話 03-3225-3590
FAX 03-3225-3593
会 費 3,000円
郵便振替 00180-7-12442
印刷所 祐文社

愛鳥クイズ

【前回の解答】

カモに関する○×クイズでした。

1. ヒドリガモは、採餌の時、逆立ちになって餌を採るが、この時、水中で目は開いている。

→ ○

ヒドリガモの他にも、マガモやオナガガモ、ホシハジロなどの水中で餌を採るカモやハクチョウなどは、餌を探すために目は開けている。ただし、透明な瞬幕が覆われているために害はない。瞬幕は、種類によって違う。カワガラスは白い。

2. カルガモの足指の色は、オレンジ色である。

→ ○

3. オカヨシガモのくちばしの色は、オスもメスも同じ色である。

→ ×

オスは黒、メスはオレンジ色

4. オナガガモが水面で止まっている時、足の動きも止まっている。

→ ×

止まっていたら流されてしまうので、たえず足は動かしている。

5. オシドリは、死ぬまで夫婦の相手が変わらない。

→ ×

毎年、相手が変わる。仲が良いのは、繁殖期の一時期だけ。

6. ホシハジロのオスの目（人間で言う虹彩の部分）の色は、赤い。

→ ○

メスは黒い。

7. マガモのメスの尾羽はカールしている。

→ ×

オスだけがカールしている。

8. カモの仲間が都道府県鳥になっている所は、2つある。

→ ×

カモの仲間では、山形・鳥取・長崎県の3県で、オシドリが指定されている。

9. キンクロハジロの目の色は、オスもメスも同じ色である。

→ ○

共に黄色。

10. カルガモのオスには、エクリプス（繁殖が終わってオスの羽が生えかわる時にメスと同じような羽の模様になること）がない。

→ ○

オス・メス同じ色なので、常にエクリプスのようなもので、他のカモのようにオスが目立つことがない。

【参考文献】

中川雄三：水中さつえい大作戦（たくさんのふしぎ No.128），福音館書店，1995

叶内拓哉：野鳥，山と溪谷社 1991

【今回の問題】

今回は、巣についての問題です。巣というのは、子育てのためにつくるだけで、そこで寝たりすることは、ほとんどありません。しかし、巣は、鳥の仲間によってずいぶんと特徴があるものです。

下記の番号に合う種をA～Lの中から選びなさい。

- ①自分で木の幹に穴を掘って、巣をつくる。
- ②巣をつくらないで、他の鳥の巣に自分の卵を産みつけて育ててもらっちゃっかり者。
- ③他の鳥がつくった巣を横取りしてしまう鳥。
- ④人家の壁等に泥と藁等で巣をつくるもの。
- ⑤水の上に巣をつくるもの。
- ⑥タカの巣の中に巣をつくってしまう、こわいもの知らずの鳥。
- ⑦木の洞を巣に使うもの。
- ⑧木の枝に皿形の巣をつくるもの。
- ⑨電柱に巣をつくるもの。
- ⑩他の鳥が木の幹に穴を開けてつくった巣に泥で壁をつくり、自分の体に合う大きさに小さくして巣に使うもの。
- ⑪巣箱を使うもの。
- ⑫土の壁に穴を開けて巣をつくるもの。

A：カササギ B：ゴジュウカラ C：ニューナイスズメ D：スズメ E：カッコウ F：キジバト G：ショウドウツバメ H：ツバメ I：カイツブリ J：フクロウ K：カワガラス L：コガラ